

1 1月総評 西躰 かずよし

今月も多くの作品の投稿があった。そのなかでよいと思ったものをいくつか。

星空を見ていると
吸い込まれそうになり
それでもいいと思えてしまう きやま いと（兵庫県）

「それでもいいと思えてしまう」という一節に作者の柔らかな感受性を感じる。星空に吸い込まれてもいいと思えてしまうのは、そこに世界との一体感が感じられるからなのだろう。

何処の誰でもない
たくさんの水の
息継ぎになる 梁川 梨里（群馬県）

緊張感のある言葉。言葉の純度の高さを窺わせる。「水の/息継ぎになる」という一節は自身の名を喪失した苦しみからの解放を連想させる。

小春日のアンサンブルの中にいる 長谷川柊香（宮城県）

「小春日のアンサンブル」というのはじまりから展開し、清潔でしずかな孤独が全体を覆う。

訪れない夜にきる炊飯器 合川秋穂（京都府）

「訪れない夜」というぎこちなさを含む一節に惹かれる。もし「訪れない夜に付ける炊飯器」であれば炊飯器を付ける孤独な人物像に焦点が集まり、「訪れない」は説明のしすぎとなるように思う。「夜にきる」と書くことで、炊飯器をきる人物の映像から、きれた後の静かな場所へとイメージが展開する。

手を洗うのは祈りに似ている 呉田 稔（福岡県）

生きるということは何回も汚れることで、それは何回も洗うことと対の行為であろう。「祈りに似ている」と書くことで、洗うという行為を救済する。

きみの眼は哀しく光る
ぼくの背に乗ってみないか
ステゴザウルス いろは（京都府）

「哀しく光る」眼のステゴサウルスに、ぼくの背に乗ってみないかと呼びかけるぼくは、疑いようもなく輝いている。おなじ作者の作品に「寒くて人形の手になる/頬は薄紅に染まり/冬の朝のわたしはきれい」というのがあるが、これらの作品に流れる肯定感はずがずがしく、向日的であることの大切さが伝わってくる。

しにたいつくえのかどがするどい

青木雅（埼玉県）

「ごみ箱を空にする」

細村 星一郎（東京都）

「初雪が降る」

「死にたい机の角が鋭い」、「ごみ箱を空にする初雪が降る」と書くことも可能であるが、そうした直接的な私性の表現がリアルにつながらないという認識をこれらの作者は有している。用いられている平仮名や括弧は、表現される私性を一旦フィルターで覆うような効果をもたらす。現在におけるリアルとは何かを考えさせられる。